

Title	滿蒙旅行日誌
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.21, No.2 (1943. 2) ,p.120(262)- 127(269)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430200-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙 報

滿蒙旅行日誌

杉 本 忠

五月二日 強風土を降らす中を北京驛より出發。霾も毎度のことではあるが、今日のそれは殊に甚しく、車窓の外は唯見る一面の蒙々たる黄沙で二三間先のものさへ見えない。併も二重に締められた硝子戸にもかゝはらず、座席は忽ち黄粉をまぶしたやうになつて了ふ。天津で下車同夜乗船。

五月三日 目を覺した時は船は強風を衝いて白河を下つてゐた。兩岸の柳の緑が濁流故に一層對象をなして輝くやうに目に映ずる。船上はさすがに戦時色濃厚である。

五月四日 無事大連に入港。當地の旅館の満員ぶりには閉口。やむなく滿鐵調査部に塾員江間江守氏を訪ひ、同氏の御盡力で漸く宿をとることが出來た。午後は同氏の紹介で滿鐵大連圖書館を訪問、館長北川勝夫氏に面會。島田好氏の案内で善本書庫を見せていたゞいた。舊濟南海源閣藏の宋本、舊圓明園文源閣四庫本方言、宋元本零葉集、抄本洪武聖政記等何れも貴重なものであるが、何

と云つても同館で目を眩つたのは舊劉氏嘉業堂藏を含めて四十八冊の永樂大典を藏してゐられることである。卷目表をいたゞいたが、就中二千六百三——七の五卷二冊は、京都内藤家藏二千六百〇八、九憲臺通紀、江安傅氏藏二千六百十、十一南臺備要（共に刊本あり）の前に續くもので、殊に二千六百〇七卷の後半は元の御史臺に關する經世大典・析津志等の貴重な記載を含むので、筆者の忻びは非常なものであつた。尙夕方まで同館所藏の地志を見せたいとゞいた。晩は大連三田會に出席。

五月五日 今日も午前中から大連圖書館を再訪。終日地志の勉強に過す。

五月六日 午前中又大連圖書館を訪ひ、寫眞屋を招んで既述の永樂大典二千六百七卷の終りを寫眞に撮らしていたゞく。快く許して下さつた島田先生には感謝の言葉もない。但しキヤピネ八枚四十八圓也は豫算外の支出で以後の旅程に深刻な影響を與へたが、今回の旅行の貴重な收穫であつた。午後汽車で旅順に向ふ。旅順には未だ櫻が咲いてゐて、思はぬ處で二年ぶりに故國の花に接した。

五月七日 午前中旅順博物館を訪ふ。同館の陳列品は吾々東洋史の學徒にとつて全くすばらしいもので、内地や支那のどの博物館でもこれ程の満足を與へられたことはなかつた。同館を見る爲にわざ／＼海を越えてもいゝ否越えるべきだと思つた。大谷探險隊將來品、關東州並に滿蒙出土品等々一として好資料ならぬものはないが、元代關係のものとしては金州城外發見皇元故武校尉

管軍上百戸張君墓碑、熱河省發見成吉思皇帝聖旨素金牌、元統二年造元印、模製元刻絲等が注目せられた。午後は白玉山に登り忠靈塔に詣で、扶桑街の羅氏邸を訪問した。大連島田氏の紹介で當主羅子美氏が快よく招ぜられ、別棟の書庫を見せていた。舊北京内閣祕籍である明成祖實錄底本殘卷は每葉十二行二十四字今の原稿用紙のやうな縦横の罫の中に一字一字書かれてゐた。尙此の機會に戰蹟を訪れたいと念じてゐたが、バスの混雑は言語同斷で吾々のやうな慌しい旅行者には到底乗れさうもないので斷念せざるを得なかつたのは遺憾であつた。

五月八日 午前中バスで大連へ、例の寫眞を受取り一路遼陽に向つた。北支で黄土のみ見慣れた目には滿洲の赤土は何か目新しい感じである。加ふるに滿洲は水清く今梨の花盛りで頗る目を樂ませるものがあつた。遼陽に下りた時は珍しく雨であつた。

五月九日 朝起きて見ると有名な白塔が目の前に聳えてゐた。北京の天寧寺の塔などと同じ形式であるが、これはそれよりも高く、壁面に浮彫された佛像なども人の達し得ない高さにある爲比較的完全に保たれてゐる。その高塔を廻つて胡麻をまいたやうに燕が飛び交つてゐるのが北京の正陽門の箭樓を想起させた。新築の美しい忠靈塔を拜し、次いで大西門外の關帝廟を訪れた。元代の創建と云はれてゐるが、成る程元代建築等によく見る高い基壇の上に立ち修理もよく行届いてゐる。案内してくれた道士が支那と違ひ清潔な道衣を纏ひ、別れ際に當然と思つて渡さうとした支那式の御禮を固辭したのも新興滿洲國らしく一寸感心させられた。

それより城内へ入り孔子廟を見、東南隅の城壁上にある魁星樓に登つた。樓中には鬼面にして隻脚で立つ稚拙な北斗魁星の神像が失笑を誘つたが、眺望は頗る宜い。明代の金銀庫遺址、天齊廟(支那の東嶽廟)を訪ひ宿に歸つたが、遼陽は落付いた思つたより宜い處である。

五月十日 雨の中を奉天に發つ。午後は奉天國立博物館を參觀。北京や南京で故宮の寶物を見、更に旅順の博物館を見て來た目にはさして驚くやうなものはない。包頭や熱河赤峯の彩陶、六朝侍女俑の長袖にして棲をとつた姿の可憐さ、興安西省林東北方のワイル・イン・マンハ遼聖宗興宗道宗三皇帝皇后陵の壁畫の林池に鴨や白鳥の遊ぶ靜な美しさ等が目に残つた。別館の遼道宗皇帝宣懿皇后等の契丹文哀册は珍しいものである。

五月十一日 今日は城内の國立圖書館を訪ふ。奉天の交通地獄は相當なもので、バスに乗るには終點の驛前まで行かなければ途中からでは絶對不可能である。しかも常に百人以上並んでゐるのは初ての經驗で少し面食つた。圖書館では司書官新馬晉氏が快く面接され司書股長郝慶柏氏の案内で書庫を見學。所謂原裝の殿本を見せていたが、原裝とは要するに毛裝(洋書の假綴と同様紙の周圍を裁斷しないもの)のことであつた。尙文瀾閣四庫全書要略及索引一冊を寄贈せられたが、同書には劃引の書名索引が附せられてゐるので普通の四庫全書總目に比して檢索に非常に便利である。附近の支那料理店で會食の後郝股長の案内で愈々文瀾閣を見せていたが、ことになつた。北京でも杭州でも建物ばかり

りであつたのが今度こそ書物も一緒に見られるので少しく興奮を
禁じ得なかつた。文淵閣の東南に新築せられたコンクリート建二
層の新書庫内を參觀の上かね／＼一見したいと思つてゐた數種を
親しく披見出來たことは洵に此の上ない悦びであつた。

五月十二日 朝三輪車で北陵に向ふ。此の日風寒く外套に襟巻を
して尙身を切られるやうな寒さである。松の立派さとその數の多
いには驚いた。午後の汽車で北京に歸る。實は建國十周年の國
都新京を是非見たいと豫定してゐたのであるが、例の寫眞代の臨
時支出と滿洲國に入つてからは宿泊料はおろか一寸した食事や喫
茶にまで必ず一割の賣錢税を要するので、これを豫算に容れてお
かなかつた爲旅費がなくなつてしまつたのである。大陸では初め
の三等車は折柄華北へ歸郷する出稼ぎの工人連で混雜を極めてゐ
る。彼等はなか／＼愛すべき連中で相當禮讓も心得てゐるが、床
の上をやたらに唾を吐き散らすのには閉口である。その回數は數
ふるに惶なく一人として吐かないものはないのだから全く凄じ
い。恐く支那人の如く唾を吐く國民は他にその例を見ないであら
うと思つた。車内の話は何れも山海關での兌換の問題で持切であ
る。

五月十三日 無事北京着。三等車も睡の問題を除いては別に不
快な點もなく、得がたい經驗であつたと興味をさへ感じてゐたが
さて歸宅して見たら虱をうつされてゐる事を發見、これには少か
らず閉口した。

五月十八日 休養と紹介狀の取得に四日を費し、此の日午前十時

蒙疆の旅に出發。居庸關青龍橋附近の山は全く南畫の手法その儘
である。車窓に咲く大輪の薊も大陸では初めての所見であつた。
長城線を越えると多少の感慨が淡い旅愁となつて心をかすめた。
これは中支や滿洲旅行では一度も感じないことであつた。夕刻張
家口着。塾員蒙疆鑛販の辰野永田兩氏鐘紡鹽田氏の出迎をうけ宿
へ、晩は同氏等の招宴に與り一夕の歡を共にしつゝ蒙疆並に張家
口の話に耳を傾けた。

五月十九日 蒙古自治邦政府總務廳に澤井次長を訪問。大同その
他への紹介狀をいたゞき、前記辰野永田兩先輩の案内で大境門に
向つた。門の外には大好河山の大文字が掲げられてゐる。門外
の河道であり道路である河原にたつ市は今はさびれて、蒲鉾形の
幌をかけた漢人の馬車が多少集つてゐるに過ぎなかつたが、自分
は此處で一つの發見をした。それは從來よりの自分の多年の疑問、
即ちあの嚴しい長城にも拘らず、何故屢々あのやうに易々と北人
の侵入を許したかと云ふことに對する回答である。即ち實際に長
城を見ると河道に當る處だけは、さしもの長城も築いてないので
ある。もとより雨季の猛威にあつてはいかなかな長城も一とたまりも
なく潰えるか、或ひはそれより上流の洪水を惹起すから、これは
當然の事と思はれるが、しかも蒙古にあつては河道は一年の大部
分は水極めて少く、常に道路となつてゐるのであるから——近年
まで自動車すら大抵河道を通つてゐた——守備兵の精強ならざる
場合、此の長城なき河道を突破されることは極めて自明の理だと
云ふことである。晝食後水母宮に伺つた。此の邊り風水によろし

き鳥か。昔人の古墓が附る多し。風は身を切るやうに冷く。羊の群がまだ寸にも足りぬ草を食んで去つたが、その食欲と活潑さは意外な程であつた。水母宮は何等特筆する程のこともない。此の程度の處を名所とせざるを得ない張家口に奮闘せられる邦人に敬意を抱かしむるのみである。

五月三十日 早朝大同に向ふ。處々の稜線上に見る古の煨臺が蒙疆獨特の澄渡つた空の青さを一層濃く美しく見せてゐる。このあたりには山西名物の穴居住宅も、黄土の陥没した地隙も散見する。これは大體その形からも雨水の浸蝕が主因と思はれるが、なかには住民が石炭末に混じて燃料にする爲に土を取つて一層大きくするものもあるとか云ふことである。大同に近づくに連れて、花東のやうに丸く固つて咲く野花の可憐さがしきりに目に付く。後に人にきくと武藏野のむらさき草の一種であるとか云ふことであつた。

午後大同に着き城内に宿をとる。未だ日が高いので早速城内見物に出かける。大同の城内は東西南北の城門に連る大街が十字に交り、その中心の四つの牌樓の西に鐘樓南に鼓樓を設けて居り、此の種の地方都城として典型的な一形式を示してゐるやうである。先づ城内西南隅の遼代の古建築と云ふ上下華嚴寺を訪ふ。上寺の大雄寶殿は高い基壇の上に東面して建ち、堂内には東方(阿闍佛)南方(寶生佛)中央(毘盧佛)北方(成就佛)西方(彌陀佛)の五佛が安置されてゐるが高さ約二丈餘あり、これが一列に正面に並んだ状は壯觀人を壓するものがある。堂前にある石造の

懸幅は遼の大康の古物として有名である、下寺の薄伽毅藏殿の三尊佛は少しく口を開いた特異の相貌を示し、北西南の三面をめぐる藏經棚上の木造建築模型は古の宮殿の面影を傳えるかの如く興味深い。それより南善化寺に向つたが、遼金の古建築よりなる此の古刹も今は衰微が甚しい。夜は非常に温度の下る大同の街も日中は暑く住民は多く上着を脱いでゐるが、北京あたりではもう見られない昔風な赤い下着が珍しかつた。これはその後包頭あたりまで男女共に着用してゐるのを散見した。牌樓東の九龍壁を見て宿に歸る。

五月二十一日 朝石佛行のバスが急に故障で出ないと云ふので大いに當惑したが、前記張家口澤井次長の紹介状を持つて晉北政廳を訪ふた處、特別に車を出していたゞけることになつたのは豫想外の幸であつた。車は瞬く間に寫眞で幾度かおなじみの石佛寺の門前に運んでくれた。色々な人の説も見聞したが、東方大窟の隋佛が自分には一番好意が持てた。夕方時間が餘つたので又街を散策、鼓樓を東へ入つて關帝廟を訪ふた。今は學校として使用せられ、木片を持つた生徒が日本劍道の型を習つてゐたのには場所柄意外な感じをした。此處の橋の石彫の欄杆の頭には、おなじみの獅子の他に日本の三猿に似た猿があり一寸興味をひいた。門前には道路を隔て、舞臺があつた。尙此の通りには明經第とか進士第とか額を門に掲げた家があり、古都大同のおもかげをよく示してゐた。歩いて宿に歸る途中皇城街北口と云ふ處で頗る雅趣ある舞臺を又一つ發見した。正面に演眞樓、舞臺奥の兩側に妙舞清歌の

額を掲げた誠に愛すべき建築である。尙三官廟前には五龍壁があつた。夜遅く大同發。驛では未だドラム鐘より大きなストーブを焚いてゐる。寒いことも寒いが、さすがに炭都大同である。夜は屢々寒さに目を覺した。

五月二十二日 早朝厚和に着く。驛前には徳王寄贈の蒙古包が置いてある。此の地は樹木の貧弱な蒙疆には珍しい程木の多い處である。朝の清々しい空氣の中を洋車に揺られてゆくと、なにか避暑地にでも來たやうな氣がする。新城(綏遠)に宿をとり、直に特務機關を訪問する。北京の松崎特務機關長よりの紹介状を持參したので、機關長小倉少將は快く面接され、且つ以後あらゆる便宜を圖つていたゞいたのには洵に感謝の言葉もない。先づ蒙古文化研究所へ同道され、同所調査官久下司氏の案内で舊城(歸化城)の喇嘛廟を一巡した。折柄舊四月八日の灌佛會が錫利圖召に於て行はれ、小召大召等の喇嘛達も皆同寺に集つてゐた爲内部を見ることは出来なかつたが、再訪を期し附近の五塔寺を訪ねた。建築としては北京西郊の五塔寺に大部劣るが、基壇上の五塔の下部に浮彫された佛像は、此の世の美女もなかくこれには及ぶまいと思はれる程の獨特な美しさであつた。

特務機關でたてゝいたゞいた日程に従ひ、午後の汽車で一路包頭に向ふ。車窓の北側には絶えず屏風のやうに陰山が連つてゐる。折々見える放牧の牛羊が繪のやうである。此の沿線一帶の柳が下部には一向枝がなく、ひよる長い頭上にのみ枝を出して天井拂のやうな形をしてゐるので、土地のやせてゐる故かと考へてゐた處、

實は薪に乏しい爲下枝は毎年住民にとられてしまふ爲だと云ふことであつた。鏡口附近では山腹に美しい西藏式の廟が見えた。即ち沙爾沁召である。

包頭では厚和から電話があつたと云ふことで稻森特務機關長が驛まで出迎へて居られて恐縮した。晩は若い憲兵隊の方々と稻森中佐の招宴に臨み、黄河の鯉の洗ひを肴に大いに歡談した。

五月二十三日 朝特務機關を訪問、稻森機關長より包頭附近の狀勢を聞き、機關員熊谷氏の案内で黄河を見に行く。黄河の河流は變轉極りなく渡河點なども常に變ると云ふことであつた。今は水量が非常に減つてゐると云ふことであつたが、牛乳入紅茶のやうな色の河水が凄じい早さで流れてゐた。四角い渡船に乗つて對岸オルドスの地を踏みたいこと切なるものがあつたが、色々御迷惑をおかけしなければならぬのでこれは思止つた。それより城外の小南海龍泉寺を訪れた。此處は張家口の水母宮に當る處である。午後の發車時刻まで街を一人で散策。その後機關の方に送られて厚和に引返した。

五月二十四日 日曜日なので蒙古研究所久下氏の自宅を訪ひ、同氏蒐集の綏遠銅器を見せていたゞく。それより打連れて又舊城へ行き、前回見殘した喇嘛寺の内部を見る。内部の一番立派でよく調つてゐるのは大召である。錫利圖召は美しい西藏式建物であるが内部はさしたることなく、小召は荒果てゝ云ふに足りない。有名な廣興隆その他で銅器を涉つたが、かりそめの旅人の目にふれるやうな掘出物は皆無である。やはり古玩は書物と同様一ヶ所に

た。禮拜堂の中は清潔で美しい。大勢の信徒の身を清める設備を見て、北京を初め浴場經營者が大概回教徒であることを想起した。禮拜堂その他到る處に回教文字が書かれてゐるので、果して彼等にそれが読み書き出来るのであらうかとの疑問を抱いたが、これは即座に解決された。寺の奥がすぐ附屬小學校になつてゐて、信徒の子弟である幼い少年たちが頻りに回教文教科書を誦してゐる處であつたし、先生はブリキ罐の中に絲屑と墨を入れた墨池へ竹の先を尖したものをひたすと、スル／＼と回教文字を書いて見せてくれたからである。歸化城の商店ではかねて話にきいた磚茶や木碗が目についたが、蒙古刀のいゝものなどはなかつた。やはりいゝものは古玩鋪の領分なのであらうか。絨毯製造處を見たが恐るべき程の幼い少年が働いてゐた。造る處は面白いが製品は大したことではない。たゞ壁掛には一寸面白いものがあつた。

五月二十五日 午前九時軍のトラックに便乗して愈々百靈廟まで入蒙出来ることになつた。江上氏等の旅行記でおなじみの舊道ではないが路は相當な勾配である。陰山を登りつめると急に冷氣が加はつた。北側は果もなく續いた蒙古高原なのである。併し漢人地帯は未だ／＼終らない。十一時半武川着。晝食をとり十二時二十分出發。武川が漢人部落の終りかと思つたが未だ／＼である。午後一時やつと灰色のシヤラモリンスムが左手に見え、初て包が路の左手に五つ右に四つあるのを見た。漸く蒙古人地帯に入つたのである。一時二十分右手に包二つ、同二十五分更に又二個を見

起伏である。オボが陸の燈臺の役目をするに云ふことも洵に首肯出來た。頭上には鶴が舞ひ、鷹が下りてゐる。牛馬羊駱駝の放牧の群も折々目に入る。午後三時路の兩側に建物と六個の包を認めだが、これが烏盟公署と善隣協會であるとのこと、やがて寫眞でおなじみの百靈廟のある谷が見え初め、特務機關に着いたのは三時半に近かつた。此處でも村上機關長から病中にも拘はらず大變な御接待を受けた。先づ綏東事件以來の百靈廟の話を伺ひ、夕方河を渡つて百靈廟を見に行つた。遠望こそ昔の寫眞と同様であるが、近づくに従ひ見るも無殘なかり方である。廟こそ支那式と西藏式の建物の修理が出來上つてゐるが、一大都市の觀をなしてゐた僧房と云ふ僧房は悉く破壊され、屋根のあるものは一つもないのである。又廟の前方と後方にあつた喇嘛塔は悉く破壊されてゐる。何れも傳作儀軍が佛像その他寶器を偷む爲破壊したもので、由である。喇嘛廟に少年が多いとはかねて聞いてゐたが、此處にも赤い袖無し夏の衣を着た少年喇嘛が頗る多い。その原因は喇嘛の特權に對する憧憬とか、一族に及ぶと云ふその功德とか、或ひは彼等の怠惰僻が他の生産に従ふことを悦ばないとか云つた理由よりも、やはり現在の蒙古人が漢人の壓迫と昔ながらの王侯の搾取によつて經濟的に酷く逼迫してゐる爲、口減しの意味で喇嘛になると云ふのが一番強い原因ではないかと云ふことであつた。別の堂では夕の勤行が行はれてゐたが、上位のものは五佛を附けた冠を戴き、低い聲で西藏語の經文を誦する様が、薄暗い堂内に

酷く異國的に映じた。廟内には包も數個置かれてゐたが、既に修理の出來た部屋の一つで、役僧の一人に會つた。初て見參する乳茶は一寸鹽餡の汁粉とでも云つた感じで、乳果はチーズクラッカ―に似てなかく美味いと思つた。

五月二十六日 今日機關の蒙人オルドス出身イルデンピリグ君と駱駝に乗つて西方の部落を訪れることになつた。駱駝は今瘤が瘦せてゐて頗る乗り難い。併しあやめの咲き亂れた河原を谷に沿つて出發した。土と全く同色の腰の高い野鼠、やはり土色で兩脇に赤い斑點のある蜥蜴が頗る多い。空はあくまで澄渡り北京の秋を思はせるが、放牧の牛馬の他何も見えない。二時間半程の苦行の後やつと第一の包を見出した。此處には珍しく子供が三人も居り、若い娘もなかく美しかつた。併し包は今まで見た中で最も小さく、包の外被のフェルトは黒く燻り破れてゐて、此の家族の貧しさを語るかのやうであつた。羊百頭牛二十頭しか持たぬ由で、イルデンピリグに云はせるとこれは非常に貧乏なのだ云ふことだつた。心なしか乳茶も昨夕のものより薄かつたが、強い陽に照されて渴してゐた所とて何杯も喫した。返禮に藥と煙草を贈つて此處を出發。更に一時間してやつと次の包に達した。此處には三つの包があり、中央のものは來客用らしく扉も赤く塗られてゐた。此處では音にきく蒙古犬が數頭ゐるので相當緊張したが、思つた程は吠えられなかつた。此處の包内では初て佛壇を見ることが出來た。型の如く爐の右に胡坐し、包の頂にあげられた天窓や小さな戸口から、青い空や曠野を眺めると何か不思議な氣がした。土

の上に直接敷かれた、包の外被と同じやうなフェルトの上には、一人の病人が横になつてゐた。一匹の猫が飼はれてゐたが、猫はやはり蒙古でも無遠慮に我物顔に包内を歩きまはつてゐた。尙例の乳茶を目の前でいれてくれたので、これは得がたい經驗になつた。先づフェルトのサックに入れた長方形の磚茶を鐵棒で碎き、その一つまみを鍋に沸かした湯の中に入れ、之に鹽を一つまみ加へ、更に桶の乳を入れて之を藥罐に移すのである。此處では其にウルムと炒つた粟を添へてくれた。更に西方に行けば包は未だありと云ふことであつたが、又一時間も駱駝に乗るのはいさゝか僻易して歸路に就いた。歸途には孤獨の狐が草原をさまよつてゐるのに遭つた。機關に歸り附近の山頂に登つたが、傳作儀造る處のトーチカがあつたり、遠く見てオボと思つたものが、近づくると塹壕の前面に積上げた石だつたりして、昔のおもかげは更になかつた。晩は純蒙古式羊肉うどんを御馳走になり、尙貴重な寫眞を村上氏よりいたゞいた。

五月二十七日 歸途は蒙疆汽車会社の定期自動車で歸る。五日に一回のこのトラックは大變な混み方である。若い運轉士は稜線にノロの大群を見ると、道路を尻目にかけて何處までもノロを追つたりする。運轉臺の銃は此の邊りでは狩獵用に供せられるらしい。聞けば往きにはノロを一頭しとめたと云ふことである。あまりノロを驚かした故か、パンク一回故障二回で厚和に着いたのは午後六時であつた。尙前記久下氏より蒙文初等教科書・蒙漢合璧聖諭廣訓 教育要覽・厚和年事・蒙古文化研究所圖書並に古物目錄等

と共にオールドストック旗王府秘書長格什克巴圖氏の遺著蒙文元朝秘史（一—五卷）一冊が宿に届けられてゐた。同書は六卷以後も原稿は既に完成済で目下徳王の手元にあつて待印中とのことである。出版の曉は更にいたゞきたい旨お願しておいた。特務機關に挨拶を済ませ、夜の汽車で折柄張家口まで出張されると云ふ久下氏と同車。小生は一路北京への歸途に就き、翌二十八日夕刻無事歸燕した。

三田史學研究會例會報告

昭和十七年

四月二十八日（火）午後三時 於萬來舎 新入生歡迎會（第三百二十二回例會）

漢代初期に於ける住民の移動

鈴木 從道君

カルタゴ撲滅論考

近山 金次氏

五月十九日（火）午後三時 於萬來舎（第三百二十三回例會）

奴隸賣買と南北戦争

長谷川正賢君

日本國家起源論考

三浦 厚君

班田制の諸問題

今宮 新氏

六月九日（火）午後三時 於萬來舎（第三百二十四回例會）

メキシコに於けるスペインの創設事業

木室喜代治君

古代社會に於ける刀劍に就て

本阿彌光博君

南宋の名臣張浚について

加藤 繁氏

六月三十日（火）午後三時 於萬來舎（第三百二十五回例會）

武都に於ける氏族の王國

三井 昭君

日蓮の國體觀

村上 寛君

南蠻鐵について

幸田 成友氏

七月十四日（火）午後一時 於新館十二番教室（第三百二十六回例會）

滿蒙旅行談

杉本 忠氏

九月五日（土）午後三時 於萬來舎、卒業論文披露兼送別會

（第三百二十七回例會）

聖德太子研究序説

太田 次男君

古代に於ける土地所有制度

笠尾 國彦君

平安末期に於ける大宮人の生活心情

柳澤 最昭君

樂市考

菊地 正世君

神父コスム・ド・トルレスの生涯

福田 兼治君

支那古代に於ける美術思想とその史的展開

北野 政義君

制度上よりみた漢代の力役之征

加藤 忠彦君

唐初に於ける道教思想に就ての一考察

調所 武夫君

明初に於ける倭寇防壓について——特に

小島 一仁君

浙江福建を中心として——

鈴木 從道君

太平天國の對外關係

陳 荆 和君

乾隆帝安南出兵の顛末に就て

三松 圭甫君

免罪符と初期宗教改革進展の經緯

竹田 豊英君

クロムウエルの外交政策

南北戦争當時のアメリカ南部に於ける耕